

■（１１４）影響考え自殺記事にガイドライン

駅で電車に飛び込んだ大阪の小５男児が残した「遺書」は驚きだった。いじめではなく、自ら通う学校の統廃合が理由だったからだ。気丈な親の対応も衝撃だった。「世の中を変えるには、死ねばいいと子どもたちに思って欲しくない。生きて世の中を変えると強く思っ
て欲しい」

子供や有名人の自殺を報じる際、記者は「連鎖自殺」を懸念する。かつて、アイドル歌手が飛び降り自殺をしたときには、報道後に若者の自殺が続いた。ほかにも、練炭自殺が相次ぎ、社会問題化したこともある。新聞社やテレビ局は、当時から、自殺問題を考えるＮＰＯに「自殺の縁で悩んでいる人の背中を押すような報道は控えて欲しい」と要望され続けていた。

新たな犠牲を出したくないとの思いは、報道側も同じだ。以前は個々の記者が考えながら記事を書いていたが、次第に組織として一定の指針になっていった。「自殺の第一報を伝える際は、同様に悩む人が相談できる先の電話番号なども紹介しよう」「自殺を思いとどまらせるような有識者の談話を載せよう」……といったように。

今回も、地元・大阪の紙面は指針に沿った内容だった。翌朝に初報を載せた東日本向けの朝刊は、扱いが抑えめだった。執筆も編集も、読者の心への影響を考えながら進めている。（山）